

いわさき いさぶろう
岩崎 伊三郎さん

1

現在の四国中央市には、岩崎伊三郎さんという方がいました。伊三郎さんは、江戸時代の終わり頃、一八四九（嘉永二）年に生まれました。学校などない時代でしたが、伊三郎さんは父親に教えてもらいながら勉強にはげんでいました。

そんな伊三郎さんが一九才の時、日本は明治時代になり、それまでとは世の中のしくみや考え方が大きく変わっていきました。一八七一（明治四）年には、「解放令」が出され、江戸時代の身分制度によって長い間差別に苦しめられてきた人々は、身分上は解放されました。次の年の一八七二（明治五）年には学制^{がくせい}ができて、どの子にも学校で教育を受けさせるということになり、一八七六（明治九）年、地元小学校ができました。その後、一八八九（明治二二）年には、合併によって二つの村が一つになり、新たに小学校がつくられました。ちょうど、奈良県で西光^{さいこう}万吉^{まんきち}さんが生まれたころのことでした。

ところが当時の学校では、万吉さんの少年時代と同じように学校の中で平気で部落差別をする人がいたのです。伊三郎さんの住む部落の子どもたちは、小学校へ行くと、他の部落の子どもたちから毎日のようにいやなことを言われ、何もしないのに冷たくされ、その上、学校の先生でさえ部落差別をするのは当たり前だと考えていた人もいたのです。

平等な世の中になっただけなのに、差別をうけた子どもたちにとって、学校は冷たくさびしい場所ではありませんでした。「ああ、また今日も学校に行くとつらい目にあう……。子どもたちはだんだん学校に行けなくなっていきました。部落差別は、学校で友達といっしょに楽しく勉強したいという子どもたちの願いすら、踏みにじっていったのです。お父さんお母さんたちは、子どもたち以上にくやしくてなりませんでした。」

2

「一生懸命勉強しようとしている子どもたちが、なんで学校に行って差別されなければならぬのか。」

伊三郎さんは、いても立ってもいられず、お父さんやお母さんたちと相談して、小学校へ話に行きました。

「こういう部落差別をなくして、安心して通える学校にしてほしい。」

しかし、何度話してもいつこうに差別はなくならず、学校の先生たちもなくそうとはしてくれません。それどころか、学校にこない子どもが悪いのだと言っばかりです。

「こんな学校に行けるわけがない。」

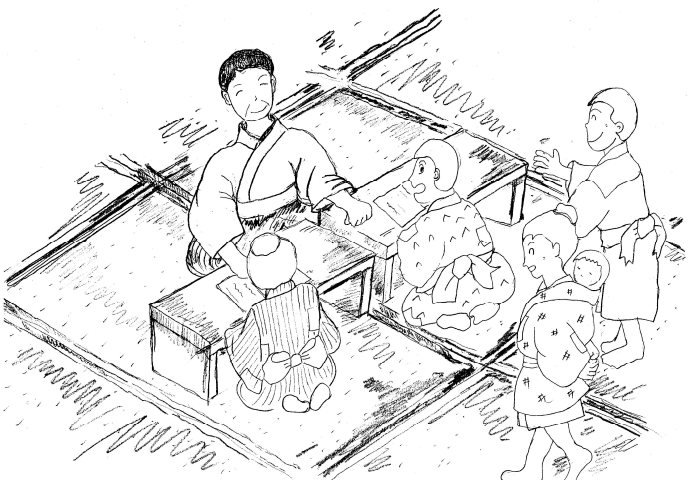
「しかし、こうしている間も子どもたちはどんどん成長する。読み書きができないまま大きくなると、何をするにしても困ってしまう。」

「このままでは何の解決にもならない。」

たまりかねた伊三郎さんは、自ら先生の資格を取って自分が勉強を教えようとなりました。何回も村役場へ通って、自分の家を小学校の分教場ぶんきょうじょう（岩崎分教場）にすることを認めさせました。一八九四（明治二七）年九月一三日のことです。

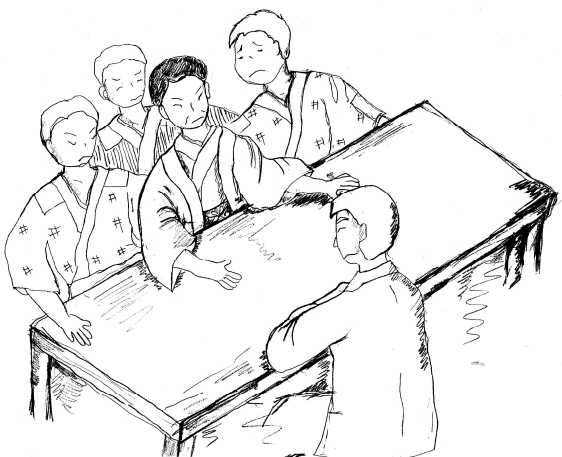
それからの伊三郎さんは、子どもたちを自分の家に集め、自分が先生となって読み書きなどの勉強を教え始めたのです。家の仕事の手伝いが忙しい子には時間を变えて教え、子もりをしなければならぬ子には「赤ちゃんも連れておいで。」と言い、子どもたちをばげましながら、どの子もあたたかくむかえていきました。時には、読み書きだけでなく、畑仕事のしかたなど生きていくために必要な様々なことも一緒に勉強しました。約五〇人の子どもたちは「伊三郎先生、伊三郎先生、……。」と、はじめて学校に安心して毎日通えるようになりました。

なかでも分教場に通う子どもたちが一番楽しみにしていたのは、年に一度の七夕祭たなばたりです。七月七日の夕方、子どもたちは手に手に七夕のおそなえを持って伊三郎の家に集合します。なすやきゅうりでつくった動物をおそなえして、願い事をしたり、楽しく遊んだりして過ごします。そしてその日は、当時はめつたにすることができなかった花火を、伊三郎先生が用意してくれていて、思う存分楽しむことができたのでした。



それから伊三郎さんは、小学校に対して、部落差別をやめてすべての子どもが安心して同じ学校に通えるようにしてほしいと話合いを続けていきましたが、全く相手にされませんでした。「分教場があるのだから、そこに行けばいいじゃないか。」と言うのです。

そんな時に、県議会議員の安藤正楽さんあんどうせいがくという人が、県議会で「差別教育反対」「分教場を廃止して、みんなが同じ学校に通えるようにするべきだ。」と訴えたのです。三度にわたる正楽さんの訴えによって、一九〇八（明治四一）年、郡内の小学校に「分教場を廃止せよ。」という命令が出されます。それまで岩崎分教場に通っていた子どもたちは、もとの小学校へ通うことになり、岩崎分教場はなくなりました。



それから五年後、伊三郎さんは村議会議員選挙に立候補りっこうほし、トップで当選しました。村全体から差別をなくして、生活をよくしていこうとしたのです。伊三郎さんは村議会でも多くの人々に信頼しんらいされ、一九二五（大正一四）年に七六才でなくなるまで議会の中心となって活やくしました。伊三郎さんのお葬式そうしきの時には、村人みんなが伊三郎さんの死を悲しみ、地元の小学校の児童も全員参加しました。

岩崎伊三郎さん

教材の見方

本教材は、学校へ行っても勉強したいと思いつながら行けない子どもたちのために、自分の家を学校として開放し、自らが教師となって多くの子どもたちに勉強を教えた岩崎伊三郎の生き方を取り上げたものである。

明治時代になると政府は欧米の文化を取り入れ、近代化を目指すようになる。1872(明治5)年には学制が公布され、義務教育制度が始まる。しかし、被差別部落の子どもたちは、義務教育なのに授業料が必要であったり、子守りや家事手伝いなどの貴重な労働力であったりしたため、十分な教育を受けることができなかった。また、学校へ行っても様々な差別を受けるため、学校からしだいに足が遠のいていった。そのため、安定した職業に就けず、経済面でも格差が広がるといった悪循環をもたらした。教育を受ける権利が十分に保障されなかったことが差別を助長したことを理解させたい。

さらに、このような中で、岩崎伊三郎は、1894(明治27)年、自分の家を開放して岩崎分教場をつくり、1908(明治41)年までの15年間、被差別部落の子どもたちの学力を保障するため自らが教師となり、多くの子どもたちに勉強を教えた。差別をなくすために立ち上がった岩崎伊三郎たちの思いや願いに共感させるとともに、その生き方に学ぶことで、自らの在り方、生き方を考えさせたい。

指導のねらい

- 差別をなくすために立ち上がった岩崎伊三郎たちの思いや願いに共感させるとともに、その生き方に学ぶことで、自らの在り方、生き方を考えさせる。
- 教育を受ける権利が十分に保障されなかったことが差別を助長したことを理解させる。

留意事項

- 1871(明治4)年、「解放令」により身分制度は改められるが、政府は差別をなくすための政策や生活の改善を行わなかったため、様々な差別が新たな形で残された。このような時代背景をしっかりとおさえ、本教材を扱いたい。
- 六年生社会科の歴史学習や総合的な学習の時間と関連させて学習できる教材である。授業等で資料として提示し、児童の関心を高めたい。
- 教育の場を通じて差別解消に取り組んだ人として安藤正楽も知られている。岩崎伊三郎との相違点などにも目を向けさせたい。